

氏 名	ゆう れいな 游 礼奈
学位の種類	博士 (芸術)
学位記番号	甲博制第 42 号
学位授与の日付	平成 28 年 3 月 22 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 (課程博士)
学位論文題目	舞踊創作におけるリアリティについての研究 ―ケネス・マクミランの視点から
作品テーマ	(舞踊創作)マクミランの考えるリアリティの舞踊 創作作品への反映
論文題目	舞踊創作におけるリアリティについての研究 ―ケネス・マクミランの視点から
論文審査委員	主査 教授 山本 健 翔 副査 教授 豊原 正 智 副査 客員教授 加藤 きよ子 副査 准教授 堀内 充

内容の要旨

本論は、イギリスのバレエ振付家ケネス・マクミランの作品に申請者が見出した「現実感」を究明することで、舞踊創作におけるリアリティを、マクミランの視点から、考察しようとするも

のである。

第一章第一節では、マクミランの「現実感」には彼個人の人生が反映されていると仮定し、その人生をたどる。そこに現れるのは幼い頃の過酷な体験によるトラウマ、舞台恐怖症によるダンサーとしての挫折、振付家としての苦悩等であり、それらを作品創作によって昇華することを試みたのではないかと推察する。そしてそのためには、従来の形式化し抽象化していたダンスを粉飾でない大きな体験として表現する必要があったとして、そのための従来のバレエからの逸脱と、古典的なバレエ言語では語れないものを語るための新たな身体言語の創出、そこに重ねられた自らの体験といったものに彼のリアリティの本質を見出す。

第二節では、マクミランの名を世に知らしめた「ロミオとジュリエット」を分析し、そのリアリティを探る。シェイクスピアの原作よりも、ロミオは「衝動的で未熟」に、ジュリエットは「わがままで強情で情熱的」に描き、原作にない娼婦たちも登場させ、権力に抑圧される若さや性のエネルギーを肯定的にとらえてみせようとしたととらえる。また具体的な振付に反映されるリアリティについては、バルコニーのパ・ド・ドゥにおける、キスに注目する。それは様式におさまらないリアルな立ち方、息遣いで、従来のバレエではまずありえない唇と唇を重ねてのものであると指摘。しかも、それが、古典的なスタイルにより、まさに地に足がつかない、恋する二人の夢のような状態を踊ったあとで、行われることにより、感情の発露としてのキスのリアリティが増すのだと分析する。

第二章では、「逸脱者」としてのマクミランと、彼が多大な影響を受けたと自ら語る劇作家ジョン・オズボーンを取り上げ、そのリアリティを考察する。第一節では、オズボーンが描き出した「怒れる若者たち」の、当時のイギリスの沈滞感や、硬直した現状への不満と反抗心が、既存の作品にはないリアリティをもたらし、彼を時代の寵児たらしめたとし、そこにマクミランとの共通点を見出す。

第二節では、やがて時代遅れになるオズボーンとの対比において、キッチン・シンク・リアリズムとも称された、オズボーン的なリアルを、マクミランは古典の様式を持つバレエ作品に反映させたこと、さらに、マクミランのリアリティはより個人的現実に向かい合い、内面から湧き上がる感情の発露により獲得されたことが、「時代遅れ」になることなく、今日まで生き続ける普遍性を持ちえたのだと考察する。

第三章では、第一節でマクミランの初期作品「隠れ家」を追創作することで、そのリアリティに迫るにあたっての、申請者の創作の方針、方法を明らかにしながら、作品の概要を記述する。マクミランが、ナチスの迫害を逃れ身を潜めたアンネ・フランクの日記から、創作したならば、

申請者は現代の日本で虐待、親の自殺、ホームレス生活といった過酷な状況を生きてきた歌人鳥居の短歌から創作するとし、第二節には選んだ短歌と、その創作のための覚書を記す。結果、アンネにとっての日記、マクミランにとっての舞踊、鳥居にとっての短歌が、それぞれの居場所となり、それは隠れ家のようにでありながら、実は外界とのつながりをもたらす場であったこと、リアリティを追求するマクミランの象徴として登場させた人物が結果、申請者自身と重なっていたというところを、創造を通して発見したと締めくくる。

そして申請者はマクミランが創作活動で行ったことと、現代の若者がバーチャルの世界で行う自己表現は似ているが、決定的に違うのはそこに自己と他者の存在を改めて感じることでできる濃密な人間関係の有無であるとし、身体を駆使して行われる現場が人々のリアルを再生させると、劇場を後にした観客がリアルを回復する新たな「リア充」をめざして今後の舞踊創造に取り組むと結ぶ。

審査結果の要旨

「リア充」といった文脈で「リアル」が語られる現代に、申請者は「誰もダンスにリアリティを求めていなかった」というケネス・マクミランの言葉を鍵に舞踊創作に於けるリアリティについての考察を展開する。そして、マクミランの内的葛藤を舞台に昇華するさまと、「リア充」という反語的な言い方に現れる、バーチャル空間にのみ自己を解放しようとする、申請者と同世代の若者の姿勢に共通点を見出しつつ、決定的な違いは、舞踊創作という極めて身体的な、しかも濃密な人間関係の中で、他者との直接的な関わりの場に身を置き続けたことであるとし、そこから自身の身体感覚というリアルを充たして存在することで観客のリアルをも再生するという表明に至る過程はきわめて興味深い。

そして、マクミランの初期作品「隠れ家」を再構築する作品創作においても、彼がアンネ・フランクの日記から、ナチスから身を隠しながらも懸命に生きる少女に、イギリスの閉塞した状況と、彼自身の閉塞感を重ねあわせて創作したことを踏まえ、現代日本で、自殺した母との葛藤など閉塞した心境を短歌に託した鳥居を取り上げて、現代を描こうとする姿勢は一貫して、評価できる。

但し、それが申請者自身の作品にどこまで反映されていたかという点については、以下の副査の報告にもあるように、いくつかの問題点もあった。

副査豊原正智の作品・論文審査報告

作品『隠れ家』について

資料により、作品のコンセプトは非常に明解であり、それが作品の至る所で意識された演出がなされていることが、観るものに伝わってくる。一方で私は、ダンサー自身の身体の動きが生み出す面白さ、ある種の「感情」－ 快感、恐怖、不安 － を感得する。すなわち、観賞者にとって、前者の意味的、ナラティブな態度と後者の「感情」が支配する態度を喚起する仕組みが作品に内包されているように思え、その点では、この作品は一定の成果を上げているのではないか。

しかし、その両者の関係について言えば、私は、言葉による理解を超えたある種の「感情」を喚起する力という点で、やや物足りなさを感じた。しかし、マクミランの「逸脱の構造」を意欲的に試み、具体的な鳥居の短歌をモチーフに、実験的創作に挑んだ努力は多しとしたい。

論文について

まず、この論文全体から、申請者が何故ケネス・マクミランを取り上げようとしたのかが十分伝わってくる。彼女の主要な参考文献及び映像資料が『風変わりなドラマー』であり、『逸脱者』であることからわかるように、マクミランは常に伝統的なバレエの形式から「逸脱」し、新しいリアリティを探求しようとした、その世界からは「風変わりな」振付家であったからである。申請者もまた、創作舞踊において、新たな振付の手法を模索してきた。

申請者は、まず、マクミランにとっての舞踊の創造は、その負のエネルギーを正のエネルギーとして作品へ昇華させることだとする。具体的には、「従来のバレエからの逸脱を試み」、「古典的なバレエ言語では語れない」新しい身体言語をつくり出すことで、申請者はそこにマクミランの「リアリティ」の本質があると論じているが、的確な指摘であろう。その具体的な手法は、1965年の成功作『ロミオとジュリエット』の分析によって論証される。主人公たちの人物造形がいかにシェイクスピアの原作、あるいは古典的なバレエから「逸脱」しているかとして論じられ、「従来の古典バレエではあり得なかった」マクミランの創作に申請者は現実での感情の生々しさを読み取り、彼の「リアリティ」を敷衍させる。

申請者はまた、マクミランの「逸脱の構造」をオズボーンの「怒りの演劇」と重ね合わせ、それが新たな創造のエネルギーになることを指摘する。例えば、アンチヒーローであるジミー・ポーター（『怒りを込めて振り返れ』の主人公）によって50年代のイギリスの無気力、沈滞感を打破しようとするようなオズボーンの手法を、「世間の通念と激しく摩擦」するが、それは一方で「自己の発見に導くような栄光をになうもの」として小田島から援用する申請者の引用は、マクミラ

ンとの関係において適切であろう。すなわち、マクミランの「逸脱」もオズボーンの「摩擦」もただ単なる否定や反抗ではなく、新たな創造のためのものであり、「自己発見」のエネルギーなのである。「怒れる若者たち」（オズボーン）や最下層の娼婦あるいは「美しくない身振り」（マクミラン）を登場させるのはそのためである。その共通性のために申請者はオズボーンをこの論文の文脈に組み込んでおり、その展開は評価されよう。

舞踊創作のために鳥居の「短歌」をモチーフとする申請者は、彼女の根底にある「個人的な抑圧・苦境」が創造のエネルギーになっていると考える。それが「生きづらさを作品に昇華」させる力となるのであり、短歌がその生きづらさを創造の「武器」にすることができるという鳥居の言葉にマクミランとの共通の創作の姿勢を見出し、自らの作品『隠れ家』のコンセプトとし、創作の方法としていることは十分理解し得る。

以上のような、申請者の分析と論述は説得力があり、一定の成果を上げている。その一方で、マクミランに関する文献及び資料が少ないとはいえ、マクミランの「リアリティ」が十分掘り下げられているとはいえない。また彼の他の作品の分析がもう少しあれば、より説得力のあるものになっていたであろう。

しかし、芸術制作専攻の学位（博士）論文としては一定の水準に達していると思われる。

博士作品「隠れ家」について、副査堀内充は、作者・マクミラン・鳥居が三つ巴となって展開されることが純粋に作品鑑賞することを許されない壁となっている点に、落胆したとしたうえで、バレエにおける振付手法は時代とともに現代的なセンスが加わり、マクミラン時代から進化され、游礼奈の技法は緩やかでまた流暢で心地よいと評価。論文は題目に明白に迫り、力強く論じているのではないか。論文と作品との結びつきの観点からすると合格と判断したいとした。

副査加藤きよ子は、主題を大切に自分の言葉で、自分の個性で作品を仕上げしてほしいと指摘した。

以上のように、作品においては、論文で考察されたマクミランのリアリティに匹敵するものが、もう少し強く感じたかったところではあるが、それは、申請者と、ケネス・マクミラン、鳥居、さらにアンネ・フランクの「追い詰められた」状況とのどうしようもない距離であり、その距離を知った上で、改めて舞踊創作に関わろうとする申請者の姿勢と、マクミランにとっても「隠れ家」は初期の作品であったことをふまえ、同様、論文においてもマクミランのリアリティについての論述検証が、もう少しほしいところではあるが、あくまで「現代に密着」することに拘り、論じ、創作した態度と成果は評価に値する。よって学位・博士論文を合格としたい。